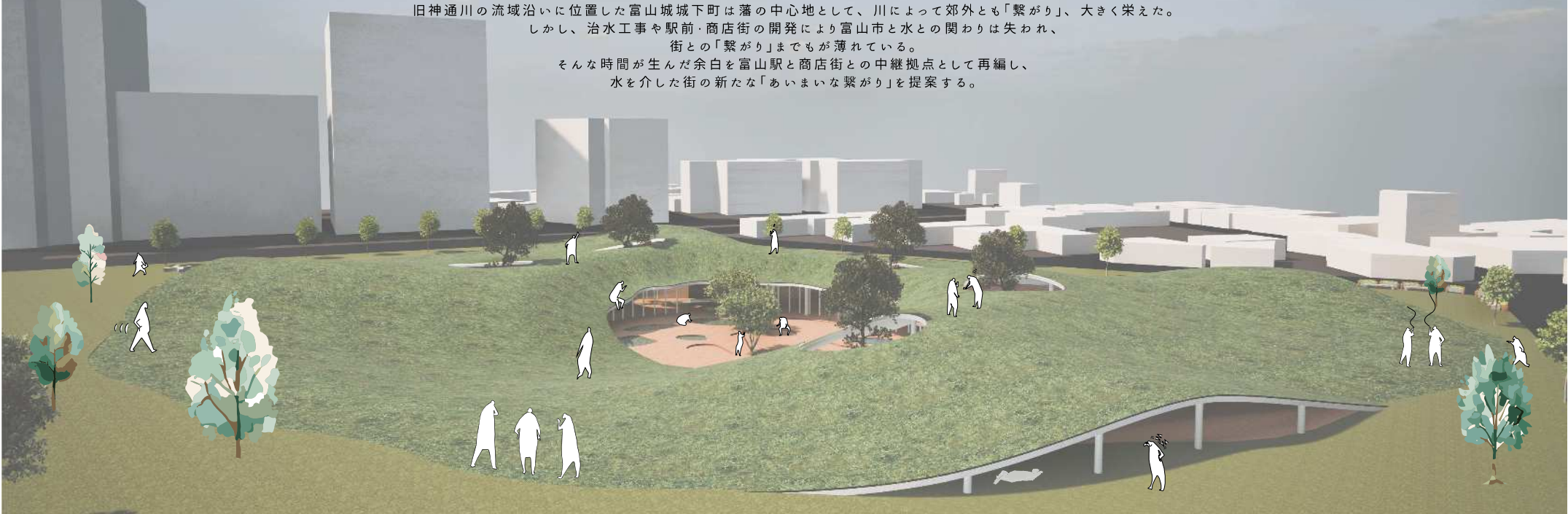


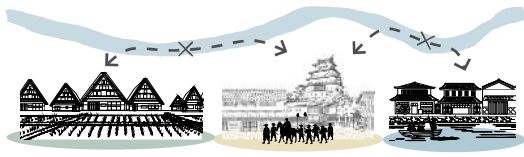
# 都市の隙間の憩い

- 分断された都市の再編成 -

旧神通川の流域沿いに位置した富山城城下町は藩の中心地として、川によって郊外とも「繋がり」、大きく栄えた。しかし、治水工事や駅前・商店街の開発により富山市と水との関わりは失われ、街との「繋がり」までもが薄れている。そんな時間が生んだ余白を富山駅と商店街との中継拠点として再編し、水を介した街の新たな「あいまいな繋がり」を提案する。

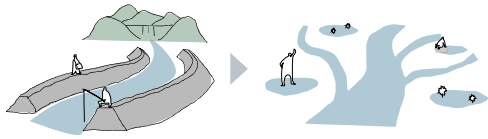


## 01-a：社会背景 / 変化した環境



富山県は河川によって、郊外と繋がることで様々な産業や暮らしを発展させてきた。その反面、毎年のように起こる水害に悩まされていた。対策として行われた治水工事によって、安心安全な暮らしをもたらした一方で、川との共生によって生まれた部外との繋がりは失われつつある。

## 01-b：社会背景 / 水害とのつきあい方



過去10年間(2011~2020)の水害被害累積額が低い都道府県のひとつである富山県も集約型機能都市を目指す中で、近年の異常気象により、これまでの河道内だけの水害対策だけではなく、流域全体で治水を考える事が不可欠である。

## 02-a：計画敷地 / 馳越線工事による繋がり喪失

富山県を流れる神通川は、明治期以前より蛇行していたことにより、度々水害を起こしていた。かつての神通川蛇行部下辺側にあたる富山城城下町周辺は、神通川によって河口の港町と繋がり、古くから貿易によって栄えた。水を介すことで郊外との繋がりを作り、水と共に発展してきた流域の象徴であったといえる。しかし、明治以降の馳越線工事により、河川は直線化され、城下町周辺は神通川から切り離されてしまった。水との繋がりは残された松川のみとなり、郊外との関係は失われてしまった。そこで富岩運河を建設することにより、港町岩瀬と富山駅北が水路で繋がり、舟による資材の運搬で一大工業地帯となった。即ち、郊外と中心地の中継地点である富岩運河が、再度水との繋がりを設え、発展・賑わいをもたらしたのである。



農村へ 明治初期 馳越線工事着工前

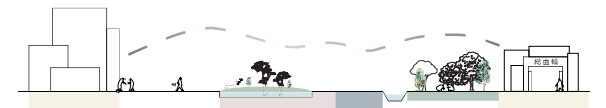


現在 馳越線工事後(大正10年に河川移行)

## 02-b：計画敷地 / 繋がりにおける問題解決

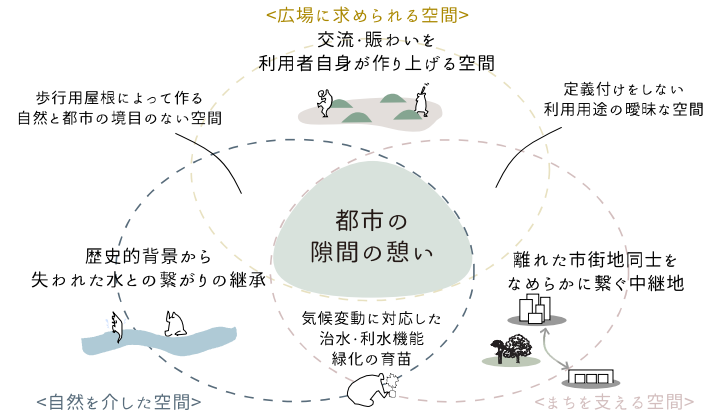


賑わいの地点・市街が分割された現状がある。これは、まるで馳越線工事直後の繋がりの失われた都市形成のようにも見える。そこで、過去に水を介して各々を繋ぐことで賑わいをもたらしたように、同様に水をコネクターとして使い、駅前=郊外、富岩運河=対象敷地、中心街=城下町と当てはめることで問題解決に導く。建築ができることは、歴史的背景を踏まえ、水害に対する対策や土地の性質・成り立ち、各々の都市空間の役割用途を読み解き、新たな可能性を模索することで、水を介した自然によって都市空間と自然を曖昧に境目なく繋げ、後世に残るような賑わいを創出することであると考える。



### 03：提案 / 分断された街と街を繋ぐ

本提案では、**馳越線工事により市街地が分断して形成された環境**について考える。その環境に、観光客、県庁利用者、地域住民が混ざり合い交流する**繋がりの中継拠点としての県庁前広場を再編**することで、失われた水や、市街地同士を繋ぐ新たな関わりを再考する提案をする。独立した市街地を水を介して繋ぐ建築は、富山市の歴史を後世に残し、治水・利水のインフラ整備と共に、賑わいを失った県庁前に多様な利用者の活動空間を生む。

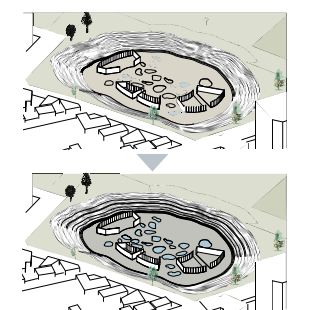


### 04：空間の考え方

多方面の繋がりを創出するために、**"歩行用屋根による場所の設え"**と地形操作によって、県庁前を中心にまちの余白を再構築する。

	展開する風景	水との繋がりを作る空間	賑わいを作る空間	まちを支える空間
歩行用屋根による設え	緑化による空間修景		○	○
	曖昧な空間の創出		○	○
	周辺空間活用連鎖効果		○	○
地形操作	減災ツールへの転用	○		○
	石材ファニチャー	○	○	
	遊水地になる雨庭	○	○	

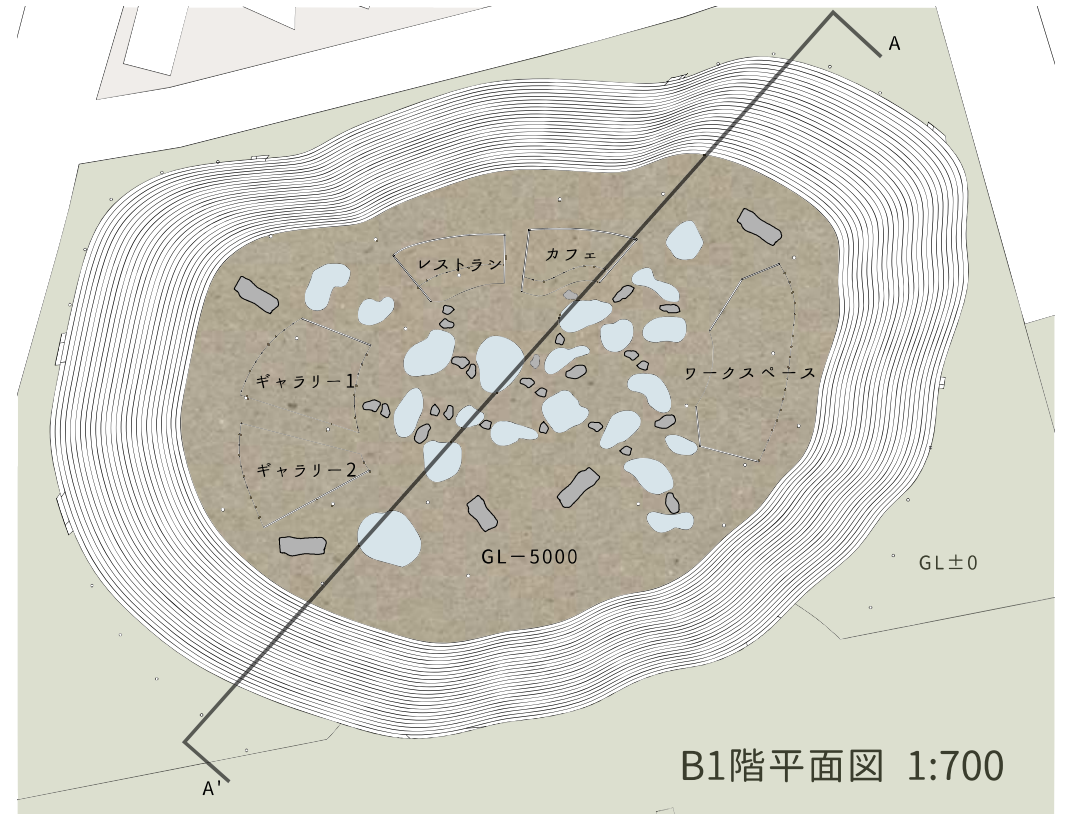
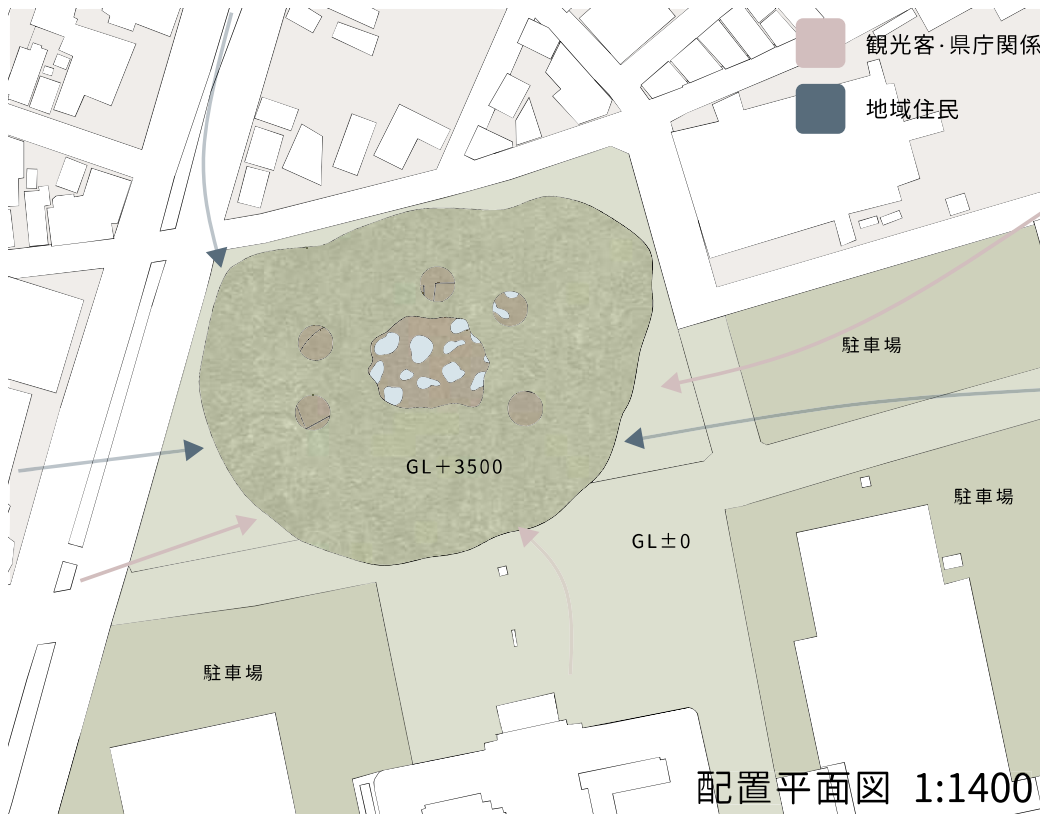
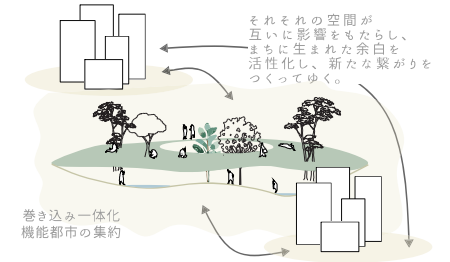
雨水貯留によって移り変わる風景



#### 05-a：望む未来の形

**まちと人々が賑わいともに成長するまち**  
 コンパクトシティへの開発が進む富山市において、使われてない余白を有効活用し活性化させることで、今まで築いてきた地域のつながりをより深め、人々とともに成長していくまちを目指す。非日常空間での賑わいと憩いの場を求め、働く人、地域住民、他方から様々な人が訪れるまちへと変化することを促す。

- ① 交流や発信の機会・憩いの場の創出により、さまざまな人々が関わり合い、賑わいを生み出す。機能型都市の集約の一環として、賑わいの創出点を巻き込むことで、富山市がより一体化したまちへと成長する。
- ② 屋根面の緑化・内部空間の植栽が成長することで、自然によるアメニティ環境が整っていく。景観的かつ空間的に心地好いまちが木々が成長するように、育まれていく。





**-緑化による空間修景-**

県庁前広場としての価値を残しつつ、現存の自然を生かした空間を作り出す。駅前都市空間と中心街の都市空間を、仲介する場所でありながら植物が少なく一面コンクリートでできた質素な空間を、まちに中途に点在した緑をまとめることによる自然空間の創出によって修景する。

**-自然と交わる屋根空間-**

地面の一部がめくれ上がるようにしてできた入口は、地面をなだらかにつなぎ人々を地下へと吸い込んでいく。屋根面の緑化で座る、寝転がる、散策する、遊ぶなどの様々な利用により、道や場所としての価値が生まれると同時に賑わいを創出する。

**-掘り込みによって生まれる空間-**

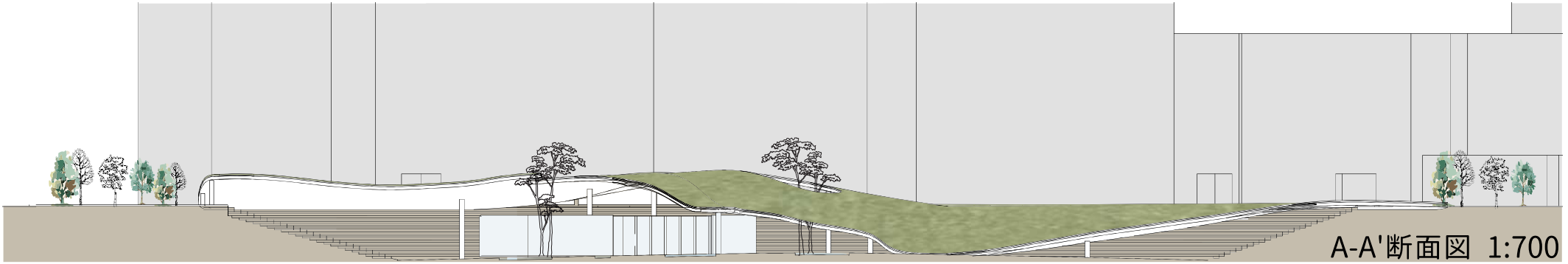
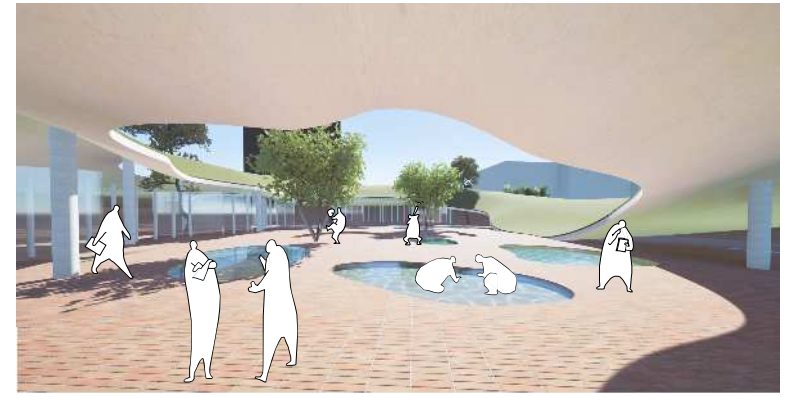
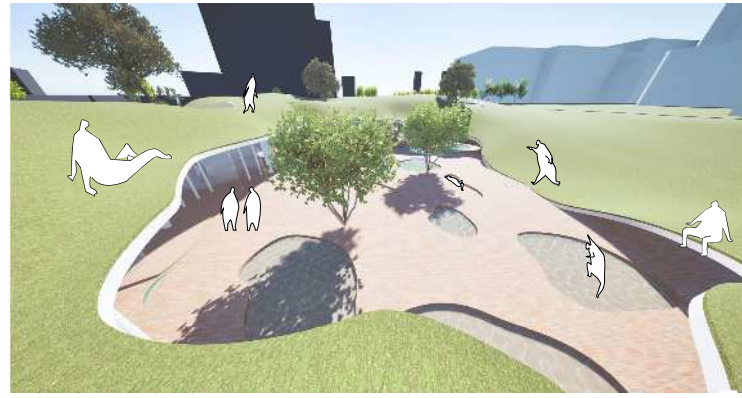
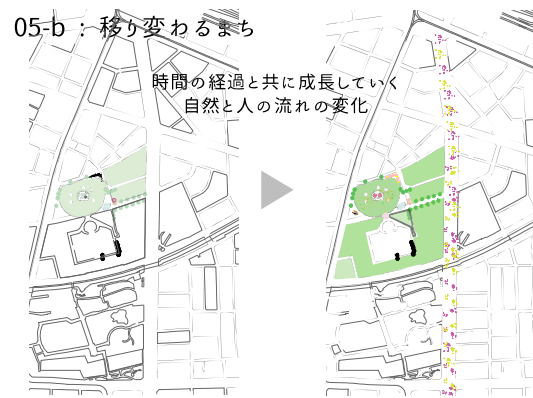
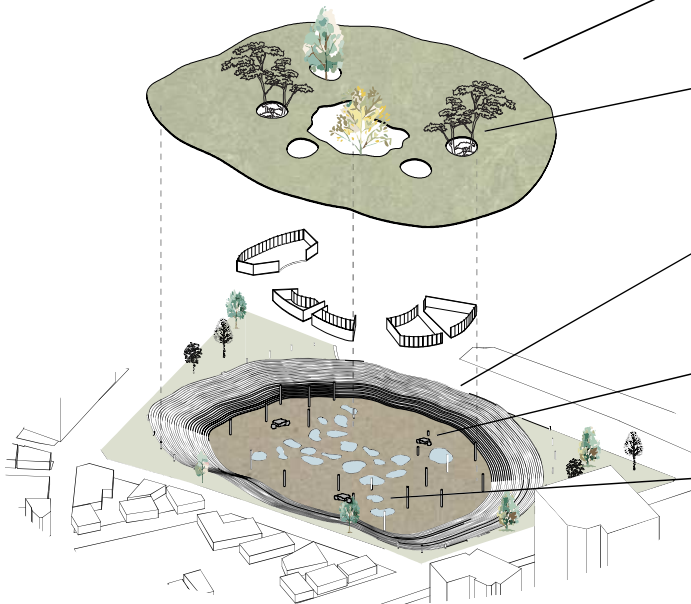
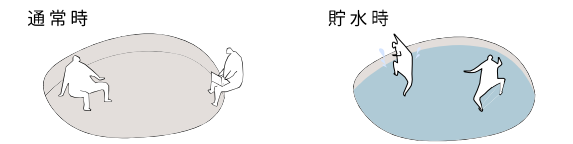
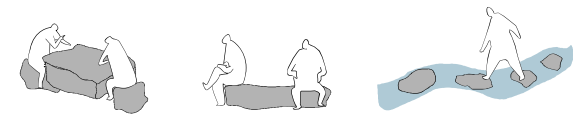
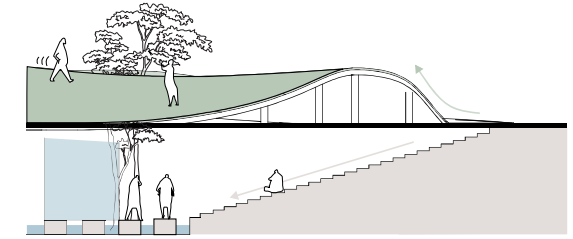
身を隠す秘密基地のような地下空間を創造し、外から中が見えない特別感や興味を惹き立てる。あえて内部空間をカフェやギャラリーなどの都市空間で構成することで、外観からは自然の一部として捉え、都市と自然の曖昧な空間を生み出す。

**-石材ファニチャー-**

地面を掘り起こした際に採掘した石を再利用する。石の自然な形やテクスチャをそのまま活かし、テーブルやベンチ、スツールなどの家具や、飛び石として転用する。

**-減災ツールとしての運用-**

埋め立て地特有の水はけが悪いことを活かして、雨天時には雨庭のくぼみに水が溜まることで親水空間を創出する。水の溜まっていない雨庭では人がやすらぐ場所として利用できる。また、貯水や拡散型の治水により水害リスクを軽減する役割を果たす。多数の雨庭と掘り込みそのものを貯水エリアとし、掘り込みの外側にドレインタイルと排水管を設け余分な水を排水する。



A-A'断面図 1:700